

オリ・パラ かわらばん No.2

香川県教育委員会

「リオデジャネイロオリンピックに参加して」

リオデジャネイロオリンピック国際審判員
沖山 功 (おきやま いさお)



(経歴)

東京都八丈島出身、茨城県霞ヶ浦高等学校に進学
国体レスリンググレコローマンスタイル48kg級優勝 日本体育大学に進学
全日本学生選手権大会フリースタイル52kg級優勝、全日本選手権大会フリースタイル52kg級優勝
香川県立高等学校保健体育科教諭として赴任、
指導者として、全国大会優勝者、入賞者を多数輩出
国際審判員1S級に合格
リオデジャネイロオリンピック国際審判員として派遣

2016年8月14日から21日までの8日間、ブラジルリオデジャネイロで開催されたオリンピックにレスリング競技の審判員として参加してきました。8月10日、レスリング日本女子選手団と共に成田を出発し、ニューヨーク経由で30時間かけて地球の裏側といわれるリオデジャネイロに到着しました。季節は日本の反対であることから、朝晩は冷え込み、上着が必要なほどで、ジカ熱で不安視された蚊もいなかったように思います。また、心配されていたような競技場の未完成問題や、治安の悪さなどということは、開催期間中全く感じる事がなく、多少の渋滞などはあったものの、他競技も含め、滞りなく行われている様子でした。レスリング競技の審判員は50名招集され、各国の代表選手347名は8日間メダルをかけて熱戦を繰り広げました。



国際審判員を目指して

そもそも審判を目指すようになった一番の要因は、四国に全国大会以上の大会で審判をできる人が一人もいなかったことでした。レスリングは、よりメジャーな競技として世界に認められるため、見やすく誰にでもわかりやすい試合を目指し、ルール改正が頻繁に行われていました。このような改正の動きはオリンピック以降も変わらず、最前線で情報を入手していても対応が大変な中、当時はルールの不理解から、試合で生徒に損をさせてしまうようなこともでてきたのです。これではいけないと、常に最新のルールを熟知し、指導の現場に伝達する役目を担うため、数々の大会に審判として参加し、経験を積むようになりました。

とは言え、2006年に国際審判資格を取得してから、途中カテゴリーダウンを経験しながら、リオオリンピック参加まで10年を要しました。経験を積み、レベルが上がるほど、国内の大きな大会はもちろん、年に数回海外の大会へ招集されるようになりました。2015年には海外に6回50日間、国内9回34日間の計84日。2016年には海外7回63日、国内9回33日の計96日間出向いています。オリンピック審判に選出されるために、これだけの日数を要して経験を積みなければなりませんでしたが、逆にそれだけ職場に迷惑をかけ、家庭を留守にしているわけですから、職場の先生方や家族の理解と協力なしには、成しえなかったといえます。応援して送り出してくださった香川中央高校の先生方と家族には本当に感謝しています。

国際審判員として大きな大会において、ミスなく正確なジャッジをするために、日ごろから心がけていることは、まず一つに常にレスリングと接していることです。部活動の指導の中でもルールの改正を十分に理解し、それを活かした指導をするようにしています。そして二つ目は、海外の大



会映像をインターネットで閲覧し、研究することです。「流れ」を読み、様々な状況を「想定」したジャッジをするために、自身が選手であった視点を活かしながら、また先輩審判員の意見も聞きながら研究することが重要です。オリンピックに限らず、選手はその一試合に人生をかけて勝負をしています。そのような大切な場面に立ち合い、選手のために公正、公平なジャッジをするには、日ごろから腕を磨くことを怠ってはいけません。

リオデジャネイロオリンピック国際審判員を経験して

そのようにして臨んだリオオリンピックですが、最初にマットに上がった試合は、自分がどのように動いて、どちらの手を挙げているのかも覚えてないほどガチガチに緊張しました。何度か経験するうちにリラックスできるかと思ったものの、レフェリーとしてマットに上がったのは4回でした。ファイナルのようなメダルのかかった試合は、ジャッジさせてもらうことが出来ず、思ったより出番は少なかったのです。シニアの世界大会レベルは世界選手権に二度しか参加がなかったため、経験の少なさから認知度も信頼度も低く、世界では新参者で、まだまだなのだと思感しました。また、自分のジャッジに対し、「チャレンジ」(レフェリーの判定に不服があるとき、コーチがビデオ判定を要求できること)され、自分の判定が覆されるという経験もしました。当然、全く間違えず完璧にジャッジすることはできないと分かっていますが、オリンピックのような大きな大会では肝が縮む思いがしました。



<国際審判員として、オリンピック初ジャッジ!>

東京オリンピックに向けての大きな目標



私は「記憶に残らない審判」でありたいと思っています。ミスをおかすことで選手や観客の記憶に残ってしまいます。ですから、いい審判とは必然的に記憶に残らないはずなのです。2020年、東京でオリンピックが開催されます。自国開催のオリンピックに参加できるチャンスはなかなかありません。その大舞台に「記憶に残らない審判」として選手たちのために正確なジャッジができるよう、今年また一からのスタートです。世界大会での経験をさらに積み、認知され、信頼され、東京オリンピックではファイナルを任される審判になることを目標とし、また国際審判員として世界で学んだことを日本の審判員や指導者に還元し、レスリング界のレベルアップにつなげるという大きな役目も自覚し、努力していきたいと考えています。

そして、私には東京オリンピックに向けてもう一つの目標があります。それは教え子が選手として出場し、メダルを獲得することです。リオオリンピックでは、私の母校霞ヶ浦高校、日本体育大学の後輩である樋口黎選手が銀メダルを獲得し、その喜びはひとしおでした。香川中央高校の卒業生である鴨居正和選手(現在自衛隊体育学校)はフリースタイル65kg級で2016年に全日本の二冠を制覇し、東京オリンピックに向けて一番手の位置につけています。4年後の東京オリンピックでは、教え子と共に参加し、ぜひ彼にメダルを獲得してもらいたいと願っています。香川県を代表する選手として鴨居選手の活躍を多くの県民の皆様に応援していただきたいと思えます。そして、私自身も目標を達成するため、いつも支えてくださる周囲の方々への感謝の気持ちを忘れず、これからも精進していくつもりです。



<栄和人強化委員長(中央)、斎藤修審判委員長(右)と共に>